

一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

野菜には栄養がある。食べることは栄養とエネルギーの摂取である。だが、本当にそうなのだろうか。

周防大島から届いたとれたてのスナップえんどうに食らいつくとき、僕たちの頭には栄養やエネルギーのことなど少しもない。ただどうしようもなくそられてかぶりつく。そして「うまいい！」と叫ぶ。

食するという行為を緻密に捉えようとすると、どんな風景が浮かび上がるのだろうか。これに関して、生物学者の福岡伸一が面白い研究を紹介している。それは、ドイツに生まれ、アメリカに亡命したユダヤ人科学者ルドルフ・シェーンハイマーによる実験である。

シェーンハイマーが立てた問いはシンプルだった。それは、動物が何かを食べるとき、食べものはどこに行くのだろうかという問いだ。これを確かめるために彼は、同位体標識法という手法を用い、元素に目印を付け、その元素を含むアミノ酸を作って、ネズミに三日間食べさせてみた。

シェーンハイマー自身は、食べものはネズミの体内で燃やされ、しかるべき時間が経過したあと、燃えかすが呼吸や糞尿となって排泄されるだろうと予想していた。だが実験の結果は予測を裏切るものであった。目印を付けたアミノ酸は、ネズミの全身に飛び移り、その半分以上が、脳や筋肉、消化器官や骨、血管、血液など、あらゆるソシキや臓器を構成するタンパク質の一部となっていたのだ。

食べることは単にカロリーをとることで、栄養を摂取することでもなかった。緻密に調べてみると、食べることは、文字通り自分の体の一部が、食べられたものに置き換わっていく過程であることがわかったのだ。

動物が何かを食べることと、車にガソリンを入れることの違いがここにある。車にどれほどガソリンを入れても、車を構成する部品が、ガソリンの成分に置き換わっていくことはない。ところが僕たちがえんどう豆を食べ、魚を食べ、リンゴを食べるときには、えんどう豆や魚やリンゴを構成していた分子が、それまで自分の体を構成していた分子と置き換わっていく。さっきまでえんどう豆だったものが僕になり、さっきまで魚の一部だったものが自分の一部になる。まるでカメレオンのように、僕はキャベツになり魚になりトマトになりスナップえんどうになる。

①緻密に調べてみると、想像以上にシジュールなことが、食べるときにはくり広げられている。

少なくともただカロリーや栄養を摂取しているだけというのは、食の理解としてあまりにも解像度が低い。②僕たちは食べるとき、もつと愉快で、壮大なことをしているのかもしれない。

僕は自宅で食事をするとき、食卓に並ぶ食材を生み出してきたあらゆるものの生態学的な連関を、なるべく詳細に想像してみようとする。鯛が泳いでいた瀬戸内海。その海の流れを生み出してきた大気。スナップえんどうを育てた土の微生物。土はごくみ続けた宮田さん。あそこ土には周防大島の海から打ち上げられた海藻や竹チップも投入されているのだった。種子から見事にこんなに丸々と育った豆たち。一億五〇〇万キロ離れた太陽の光を**A**びて、こんなにも豊かに育ってきた。

大豆を煮込み、潰し、発酵させて、じつくりと**C**スガタを変えてきた味噌。そういえば僕が作った味噌はどうなっているだろうか。天草の塩もある。富山の米もある。それぞれが別の進化の来歴をたどってきた動物や植物や鉱物たちが、いまこの食卓の上で共演をしている。そのすべては、少なくとも三五億年前から一度も減びたことがない「生命」の異なる表現である。同じ地球環境を、鯛は鯛として、キャベツはキャベツとして、イチゴはイチゴとして、イモはイモとして受け止め、解**C**し、この地上で生きるとはどういうことを、それぞれのやり方で表現してきた。僕たちは何億年も前に別の進化の道を歩みはじめ、ここで、この食卓で、久しぶりに再会をした。

「これはお母さんによる宇宙と生命の歴史の表現なんだよ」と僕が子どもたちに語る。息子たちは目を丸くして笑いながら「うまいい！」と叫ぶ。何気ない食事の場面から、あらゆるスケールに認識がはみ出し、この世の生態学的な豊かさに、感動としみじみとした喜びを感じる。この感動はしかし、彼らが大人になる頃には、いまと同じように魚を食べることなどできなくなっているかもしれないという悲しみと**A**合わせなのである。

春になり、法然院の土地にうずたかく積もった腐葉土を、近隣で畑をしている人たちがときどきもらいに来てくれるようになった。小倉ヒラクさんを招いたワークショップで作った落ち葉堆肥とは別に、すでにここには長年にわたって、庭掃除で出た落ち葉を重ね続けてきた結果、大量の腐葉土が蓄積されている。これをみんなでふるいかけ、小石や枝を取り除き、真っ黒でふかふかの腐葉土を、好きなだけ持ち帰ってもらうのだ。

親と一緒にやってくる子どもたちも、僕たちと一緒に土をふるいにかける。飽きたら石や枝を探して遊ぶ。育てたり、作ったりする経験もいるが、③子どもたちにはまず、「もらう」こと、「拾う」ことを、たくさん経験してほしいと思う。

自然の圧倒的に潤沢な富を、僕たちの社会はお金を払わなければ買えない商品に変えてしまう。「あのみかん採ってもいい？」と散歩中に息子に聞かれて僕は、「ダメだよ、あれは他の誰かのものだから」と答えなければいけない。自然からの純粋な贈り物を、僕たちはお金を払わなければ買えないことにしてしまった。散歩道に美味しそうなビワがなっているのに、僕は子どもたちに「採ってもいいよ」と言えない。それは誰か別の人の土地に植わったビワの木だからだ。

かつて人間は、自然からもらい、拾いながら生きていた。育てたり、作ったりする以前に、自然から圧倒的な富を与えられていた。自然から与えられるというこの経験が、人間の生活の前提にあった。物を贈り合う連鎖は、「こんなにもらってしまった」という、驚きと感謝の経験からこそ動き出すのではないだろうか。

腐葉土をもらいにくた家族の子どもたちは、石や枝を拾って、それをもらっていく。「どんどんもらってね」と僕が言うと、子どもたちも真剣になって探し始める。思う存分拾ったりもらったりできる場所を、僕たちはもつと作っていかないとけない。

知識や学問だって本当は、圧倒的に潤沢な富として、もつと自由に拾ったりもらったりできるものであってもいいはずである。**B**が集い、思わぬ来客が行き交う未来の学び舎は、拾うことともらうことの自由に溢れた場所になりたいと思う。

(森田真生『僕たちはどう生きるか 言葉と思考のエコロジカルな転回』)

- 注1 化学的にそれ以上は分解することができない物質
- 注2 物質の化学的性質を失わない最小単位
- 注3 表現や発想が非日常的であるさま
- 注4 デジタル画像の細かさを表す度合い
- 注5 生物と環境のつながりを研究する学問

問一 **A** a c のカタカナを漢字に直しなさい。なお、送り仮名が必要な場合は送り仮名も含めて書きなさい。

問二 **A** にあてはまる、身体の一部を表す言葉を考えて漢字で答えなさい。

問三 **B** にあてはまる、「あらゆる人々」という意味を表す四字熟語をを考えて答えなさい。

問四 **線部①**からは、何についてのどのような(筆者の)気持ちを読み取れますか。説明しなさい。

問五 **線部②**とありますが、筆者は「食べる」ことをなぜ「愉快で、壮大」だと述べているのですか。説明しなさい。

問六 **線部③**の経験をすることで、筆者は子どもたちがどのように成長していくと考えていますか。現在の社会のあり方をふまえて説明しなさい。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

◇中学生のソラは、同級生の臣野たちのいじめの対象になったことをきっかけに教室に行けなくなり、保健室に登校しています。ある日、保健室でハセオという生徒に出会います。ハセオはいつも俳句をつくっていて、保健の北村先生に俳句を教えています。

「じゃあ、今日のお題は、ヒマワリで決まりね」

窓辺まで、いそいそと歩いて行った北村先生は、さーっとカーテンを開けた。

保健室の前に、北村先生が作っている花壇。その花を、切り取ってきて、窓辺の花瓶にさすのが習慣だった。でも、いまは、その必要はない。背の高いヒマワリが、窓の向こうにaリン立して、大きな金色の花を、ソラたちに誇っていたからだ。

「すげっ！」と、椅子の上にあぐらをかいていたハセオは、そのまま立ち上がる。

「北村センセ、ナイス！　じゃあ、お題はヒマワリで、制限時間はいまから二十分。一句。はじめー」

「まるでスポーツみたいだね」とソラが笑うと、ハセオものつてくる。

「いいこと言うな、ソラ！　そうそう、俳句は、言葉のスポーツ。句会

は、試合なんだよ」

「がんばるわよお」

などと、

いまにも腕まくりしそうな北村先生の張り切りに影響されたのだろうか。

「おれ、ちよつと観察してくる」

と、ハセオは窓をがらりと開けると、上履きのまま、外の花壇へ飛び出してしまった。

とはいえ、張り切ればよいというものではないことが、作り始めて、ソラにはわかってきた。言いたいことを言おうとすると、あまりに十七音は少なすぎた。ほとんど、作文の一行と見分けのつかない言葉になってしまう。言葉を削る必要があるのだから、言いたいことが伝わらなくなってしまうようで、どこをどう削ればよいのか、見当がつかない。

「あのさ」とソラは、窓に近づく。花壇では、ハセオが、ヒマワリの花とにらめっこしていた。長身のハセオが、ヒマワリには見下ろされているかっこうになるので、なんだかおかしかった。

「なんか、コツみたいのないかな」

「ないよ。自由に詠めばいいんだ」

「そうは言ってもさ」

「うーん」ハセオは、コツなどいままで考えたこともない、というふうだった。

「おれはね、まずは当たり前のことはいわないようにしてる。ヒマワリだったら、『ア』とか、『イ』とかは、当たり前だろ。それいっても、つまらないじゃん」

「たしかに」ソラは、手許のノートに、さつそくメモをする。

「当たり前のことはいわない」

「それから？」

「うーん、あとは、挨拶するように詠むといいつて、いわれるな」

「挨拶？」

「そう。俳句はさ、ひとりでつぶやくようなもんじゃないってこと。誰かに向けて書くっていうのかな。その相手は、人だったり、ヒマワリだったり、場所だったり、いろいろなんだろうけど」

「挨拶ねえ」

わかったようでわからない。それでも、一応、

〈挨拶の心を持つ〉と書いておく。

ハセオのほうでは、ソラの顔をじつと見て、

「おっ、いいな、いま、一句できたわ」

「はー！？」

自分だけわかっているかのようにからから笑うハセオが急に憎らしくなり、ソラは自分の席に戻った。北村先生は、いつもの笑みが消え、真剣な表情で、ノートに向き合っている。書いては消し、消しては書き、を繰り返しているようだ。

結構本気だな……ソラは、北村先生の、知らない一面をかいま見た気がした。

そうこうしているうちに、二十分は、あつという間に経過した。

「はいはい、ゴ——ル——試合終了——」（中略）

「じゃあ、作った中から一句、これぞというのを短冊に書いて」

ハセオがまた、ポケットから短冊を出してきて、北村先生と、ソラに渡す。ハセオがどこからともなく短冊を出してくるマジック（？）にも、だんだん慣れてしまった。

「書いた？　じゃあ、それを、読みあげてみよう。はいソラくん」

「えっ、これ口に出すの？　自分で？」

短冊を持ったまま、ソラはかたまつてしまった。

「そそそ」

「それはちよつと……」

自分の句を——しかも、ほとんどはじめて作って、おそらく出来もいまいちのはずの句を、自分の口で読み上げるのは、抵抗感があつた。

「経験者のハセオくんからがいいんじゃない？　いきなりソラくんじゃ、緊張するわよ」

北村先生が、A（ ）を出してくれる。

「そっかー。ソラのが、早く見たかったんだけどな。じゃあ、まずはおれから——」

そう言つて、ハセオが朗々と読み上げる。あの日、「白雨」の句を読み上げたのと同じ、澄んだ声で。

向日葵の種みたいだなそのホクロ

——しかし、その朗読は、あのとときは、まったく正反対の効果をもたらしてしまった。

その句が声となつて宙空に放たれたとたん、保健室の空気が、さつと変わった。明るかった日ざしまでもが、一瞬で翳つたように錯覚した。ハセオの句は、あきらかに、ソラの顔のホクロを詠んだものだった。

「……どうかな？　感想は？　んん？」

ハセオは、二人の顔を見比べる。はじめて学校で句会ができたうれしさ、会心の句ができたうれしさが、その顔にはあふれていた。だが、対照的に、ソラの顔は、ひきしまり、かたくなっていた。

北村先生は、あわてていた。何か言わなくては、という焦りが、顔に出ていた。

ソラはそのまま立ち上がつて、保健室を出ていこうとした。うっかり、入り口わきのラックに入れておいた鞆を、取り忘れるところだった。ドアの前でキュツとするどく上履きを鳴らして方向転換し、鞆のほうに手を伸ばす。

「どうした？」と、駆け寄ってきたハセオが、その腕をつかんだが、ソラはそれをふりきり、ドアを開けて、廊下へ踏み出した。

◆ ◆ ◆

三日前の句会でハセオが作った句が、ソラには、どうしても許せないでいた。

ヒマワリの花壇で、ソラの顔をじつと見ていたハセオ。

気にしないようなそぶりはしていたけれど、やはり、このホクロのことを、おもしろおかしく俳句にするほどには、関心を持っていたのだ。

ほかの花よりも、ずっと大ぶりで、存在感のあるヒマワリ——種も、りっぱだ。その種にたとえられた、この、大きなホクロ。

ベッドの上で寝返りを打つ。（中略）体重でベッドがきしむ音が、いやに大きく聞こえる。昼ごはんの時間が近づいていたけれど、動いていないせいか、ちつともおながすかない。

そのまま眠った夢の中に、さまざまな記憶の断片が、ただよっていた。椅子に縛りつけられ、まぶたを金具で固定されて、むりやりいくつもの映画を見せられているようだった。短く断ち切られた記憶が、何度も目の前を過ぎつては、消えていく。

目覚める直前に見ていたのは、臣野シゲルたちが、ソラが買ってきたパンを、パスし合っている記憶だった。（中略）

「あの、お友だち、来てるわよ」

母が言い終わらないうちに、

「ソラ、おれ、おれ」

と、聞きなれた声があった。

ハセオだ。驚きよりも、奇妙な感覚が、先におそつてきた。自分の家の中で、ハセオの声を聞くなんて。

少しだけ開いたドアの向こうには、困惑ぎみの、母の顔があつた。

その顔の上に、長身のハセオの顔が、のぞいている。

ソラは、反射的に、マスクをしていない口元を手で隠そうとしたが、やめた。いまさら、と思ったのだ。

「ごめん、ストーカーみたいなことして……北村センセにたのみこんで、

住所、教えてもらったんだ」

ストーカーみたい、じゃない。

家にまで来るなんて、完全にストーカーだよ、と思いつつ、ここまで入ってきてしまった以上、無視することもできない。ハセオのことだ。玄関で迎えた母に、いつもの調子で、相手が吹き飛んでしまいそうな風速で言葉を送り続けて、強引に家の奥まで入り込んできたのだろう。

「待つて待つて」

こんなにかちかちしている部屋の中を、見せるわけにはいかない。着ているものも、パジャマのままで。

「ちよっと、外行こ」

ソラは、ハセオをうながして、階段を下りていった。(中略)
すでに日が暮れかけていた。(中略) おのずから足が向いたのは、いつもふらつと行く陸橋の方角。後ろをついてくるハセオは、いつになく物静かで、おなかをすかした犬のように素直だった。(中略)

道が急に盛り上がったところに、陸橋がかかっている。ほとんど人の通らないこの橋で、通り過ぎる電車を眺めていると、心がおちつくのだ。学校で臣野シゲルたちのいじめの対象になっていたときも、放課後こへ来て、欄干にもたれて、時間を過ごしたものだ。(中略)

ソラが、いつものとおりに欄干にもたれると、ハセオも、となりで同じポーズをとる。

しばらく、しみりとした沈黙が流れるのかなと思っていたが、
「ソラ、あんな、悪かったよ」

ためらいもなく、頭を下げてくるあたりが、ハセオらしいと思いつつ、ソラは反応を示さなかった。

「あんな、あの句なだけどな……いや、まず、これ見て」

ハセオは、さつと手を出す。どこから取り出した様子はなかったから、ずつと手に握っていたようだ。

てのひらを、ひらく。薄暗がりの中でも、あきらかなそれは、ヒマワリの種だった。

ソラの顔がくもったのを察したのか、ハセオは早口になって、

「これ、北村センセの花壇のやつを、一個もらってきたんだけど……おれにとつてはな、ヒマワリって、こう、噴水みたいというか、花火みたいというか……」

ハセオは、両手をけんめいに上下させた。たぶん、噴水のかたちを示したかったのだろう。でも、だれかを応援しているような、場違いなジェスチャーになってしまっていた。

「……こんな感じでな、地面の中のパワーが、あの茎を通して、噴き出しているように見えるの。それで、ヒマワリの種は、そのおおもとつていうか」

指先に挟んだ種を、じつと眺めつつ、

「それで、あのとかな、ソラの顔にホクロあるなー、ヒマワリの種みたいだなー、ソラの顔からヒマワリ、ぶわーっと生えたらおもしろいなーとか：ぜんぜん、そんな、バカにするつもりは、なかったんだよ。あのあと、どうしてソラが怒ってんのかわからなくて、北村センセに言われて、ようやく気づいたんだ。でも、どうしたらいいのかわからなくて」
こぶしを握りしめて、種を再びてのひらにおさめてから、ハセオは、さつきと同じ、欄干でソラと並ぶポーズに戻る。

ぼつぼつと話すハセオの声は、ときどきやつてくる電車の轟音にかき消されながら、続いていく。

「でもな、おれ、下手くそなんだよな。まだまだ、俳句、下手くそでさ。あの句もさ、挨拶のつもりだったんだ。あのとかな言っただろ？ 挨拶だつて……そんで、おれも、ソラに何か挨拶の俳句が作れんかなと思って、それで出てきたのが、あの句でさ……でも、下手くそだよな、ぜんぜん伝わってないんだもんな、まだまだだよな……」

ハセオは、話しているうちに、ソラに謝っているというよりも、自分の俳句の下手さにしよげているようになった。

「挨拶句ってさ、うまくいくと、すげー句になるんだよな、たとえばさ、昔の人の句で、

① たとふれば独楽のはじける如くなり

っていうのがあって、これ、死んじゃった友だちっていうか、ライバルに贈った、まあ、一種の挨拶句なんだけども、コマがばちばちって戦うような二人だつて言ってます、こういうたとえができるのって、カッコいいと思うんだよな。②おれの句、ぜんぜんだめだよな」

聞いているうちに、ソラは、怒りや不快感よりも、呆れる気持ちが強くなってきた。

コイツ、どれだけ、俳句好きなんだよ。

ソラに謝っているのか、自分の「カリヨウ」不足を嘆いているのか。だいたい、友だちが死んだときに詠まれた句を例にあげるなんて、不吉じゃないか。友だちの前で――

そこまで思つて、ソラははつとした。

そうか、僕にとつては、ハセオはもう友だちなんだ。

「もう、いいよ」

その言葉が、素直に出てきた。③いま浮かんだというよりも、すでにソラの中にあつて、出るのを待つていた、という感じの言葉だった。

ハセオが、悪意で、ああいう句を作るやつじゃないことは、わかつていた。こんなに俳句が好きなハセオが、俳句を、押揃うためや、馬鹿にするために使うはずはない、ということ。

「そっか、ありがとう！」

その言葉が聞きたかった！ とばかりにハセオの顔が輝いたのは、夕闇の中でも、はつきりわかった。

ソラの手を、ぐつとつかんで、あらあらしく上下に振る。

「おれ、ずつと俳句をやつてきたけど、ソラだけなんだ、『俳句なんて』って言わなかったやつ。オヤジもさ、友だちもさ、みんな、『俳句なんて、古臭い』とか『将来のために何の役にも立たない』とかつて……」

ソラははつとして、ハセオの顔を、正面から見た。

こういうふうに見えて、ハセオも、いろいろな言葉に傷つてきたのかも知れない。(中略)

ぶんぶんぶん。

激しく手を振られて、ようやく解放されたソラの手には、何か違和感があつた。

手を開くと、そこにはヒマワリの種がひとつ。

「なに、これ」

「いや、やるよ」

「こんなもんらつても……さつき、うち見たでしょ？ 植える庭、ないよ」

「じゃあ、こつから投げるか？」

ちようど、鎖をひきずるような音を立てて、陸橋の下を、電車が通過したところだった。

「線路のわきに、いつかヒマワリが咲くかもな。それはそれで、俳句に詠んでみたい」

ソラは、その言葉にうなずくと、ぱつと欄干の向こうへ、こぶしを振つた。

ハセオは、フェンスに阻まれる恰好になりながらも、投げられたもののゆくさを追おうと、身を乗り出した。

しかし――線路へまっさかさまに落ちていくヒマワリの種は、いくら目を凝らしても、見えなかった。

ハセオはすぐさま、ソラのほうに視線を移した。待ちかまえていたように、ソラはてのひらをさしだしてみせる。そこにはさつきと変わらず、大地のパワーのおおもとが、ひとつ。

「捨ててもいいって！」と、ちよつと照れくさそうなハセオ。

「いや」ソラはかぶりをふつて、ぐつと手の内の種を握りしめた。

④「取つておく」

(高柳克弘『そらのことばが降ってくる 保健室の俳句会』)

問一 □ a c のカタカナ部分の漢字を使った二字熟語を自分で考えて答えなさい。上下どちらに使ってもよい。

問二 「ア」「イ」にあてはまる言葉を考えて答えなさい。

問三 線部 A は慣用句です。() に当てはまる言葉を考えて答えなさい。

問四 (1) 線部①の句はどのようなことをいっていますか。説明しなさい。

(2) 線部①の句と比べて、ハセオが――線部②のようというのはなぜですか。ハセオの気持ちをくわしく説明しなさい。

問五 線部③とありますが、「出るのを待つていた」という表現をふまえて、ここでのソラの気持ちを説明しなさい。

問六 線部④とありますが、この時のソラはどのような気持ちだったでしょう。説明しなさい。

□

□

□

□

□

□

—

解答用紙 「国語」

受験番号

□
には記入しないこと。

()

問一	問二	問三	問四	問五	問六
a	A	B			
b					
c					

□

□

□

□

□

□

□

二

問一	問二	問三	問四	問五	問六
a	ア	A	(1)		
b	イ				
c					